

# 平成26年度-困難を有する子ども・若者の相談業務に携わる民間団体職員研修 《研修生募集》

平成26年 **12月15日(月)~19日(金)** ※東京都渋谷区代々木にて開催

全体  
講義

## 「日本の若者の現状と課題～ニート・孤立無業者の実態と支援」 東京大学社会学研究所 教授 玄田有史



孤立無業(Solitary Non-Employed Persons:SNEP(スネップ))とは、20～59歳の未婚無業者のうち、ふだんずっと一人であるか、家族しか一緒にいる人のいない人々のことです。2001年には85万人だったのが、2011年には162万人まで急増しています。「男性、30代以上、進学せず」が多かったのですが、最近は「女性、20代、大学卒」のスネップも増えています。特に若年無業者でスネップが増えていることは深刻な問題となるおそれがあります。働くことを断念した若者であるニートとならんで、スネップは今の若者の「生きづらさ」や「つながりの乏しさ」を象徴しています。今、どのような若者支援が求められているかを、スネップやニートを例に考えます。

全体  
講義

## 「子ども・若者を取り巻く社会環境と地域で支えることの意義」 沖縄大学名誉教授 加藤彰彦



子ども・若者の暮らしは、戦後の経済成長政策の展開から、私生活優先の社会へととなりました。産業構造も、協働関係が基軸にある第一次産業から第三次産業へと変化し、個人の業務負担や、個人で仕事をする領域も増え、他者と関わるゆとりも少なくなりつつあります。いじめ、不登校、非行等の背景には、こうした社会変化の影響もあるといえ、この状況を再編するには地域社会の再生が重要となります。人との繋がりがしっかりと有る地域では、家庭も学校も安定しやすく、子ども・若者の暮らしという側面でも素晴らしい環境です。また、地域の身近な人々と支え合いながら、共に暮らすことは人間社会の原点でもあります。横浜ドヤ街で日雇い労働をする方々とその子どもたちへの相談・支援、児童相談所のソーシャルワーク、沖縄での子ども・若者支援の研究と実践。これらの経験と体験に触れつつ、地域社会の役割と、子ども・若者の暮らしの意義について考えます。

全体  
講義

## 「参加意欲と関係性の構築を促すファシリテーション」 地域学校精神保健福祉ネットワーク事務局長・東京都教育センター教育相談員 臨床心理士 多田史康



子ども・若者の支援の現場では、支援のひとつとして様々なグループワークが行われることがあります。グループワークを行う際に支援者の行うファシリテーションは、ワークの体験を充実したものにするために重要なものです。今回は、受講生の皆さんがグループワークを「参加者」として実際に体験することで、受講生同士の関係が深まり、最終日の発表へのやる気が高まることを期待したワークを行いたいと考えています。また、体験を通してグループワークのファシリテーションについて考える時間も持てるとういと考えています。

事前  
応募

詳細については内閣府ホームページの募集要項を御覧ください

■<http://www8.cao.go.jp/youth/bosyu/soudan/bosyu-6.html>

# 「関係者を巻き込み、動かす目標設定と組織づくり」

立教大学 21世紀社会デザイン研究科特任准教授 坂本文武



全体  
講義

周囲の人からの関わりや支援を必要とする若者の数は増える一方、彼らを取り囲む環境は複雑・複層化しています。

困難を抱える若者への相談・支援事業を継続もしくは拡充するためには、さらに支援の輪を拡げていかなければなりません。この講座では、目標設定の発想や視座について、講義とグループワークを通して学びます。具体的には、「あなたの団体はどのような未来をつくろうとしていますか?」「なぜいま困難を有する子ども・若者を支援すべきなのか?」「若者が自立できないのは保護者の責任論になるのか?」などの問いに対する答えを参加者全員で探ることを目的にします。

「貧困・低所得者への理解／支援と公的支援制度の活用～子どもの貧困対策・生活保護制度等に焦点をあてて」  
／立教大学コミュニティー福祉学部 湯澤直美

分科会A



貧困・低所得状況にある方々への支援にあたっては、貧困が当事者に及ぼす影響を踏まえ、伴走者として寄り添う姿勢とソーシャルワークの視点が大切です。そこで、本講義では、貧困・低所得者の現状をどう理解するか、ストレングス視点をはじめ支援に必要な視点を共に考えます。そのうえで、その解決策である貧困対策について、子どもの貧困対策、生活保護制度などについて共有するとともに、どのように制度活用を図ればよいかを検討します。

「依存症の問題を抱える当事者や家族の支援～アルコール・ギャンブル・ゲーム・買い物等の依存症から回復していくために～」  
／NPO法人ジャパンマック地域活動支援センター北九州マック施設長 精神保健福祉士 亀田順子



子どもや若者を支援する中で、依存症の問題が背景にある場合があります。依存症は病気であり、治療と支援につながることで回復は可能です。しかし相談・支援の現場では見過ごされることが多いため、回復に至らないケースもあります。まずは支援者が依存症の知識と回復方法を知ること、子どもや若者、そのご家族が抱える問題を解決に導く一歩になります。本講義では、依存症という病気の基本的な知識、相談現場で見分けるポイント、回復のための社会資源、資源につなげるための技法(動機づけ面接法)や依存症回復のためのプログラムについてお話します。当事者から寄せられた回復後の感想等もお伝えできればと考えています。

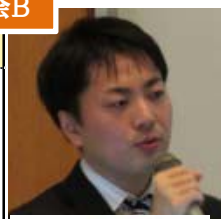
「効果的なインテークのやり方について～ロールプレイも交えて学ぶ～」／NPO法人育て上げネット 古賀和香子



支援におけるインテーク面談では、「相談者との関係性を築く」、「相談者の主訴やニーズを明確に把握し、見立てる」、「その主訴やニーズに支援者側が提供できるサポートがなじまないようであれば、適切な支援機関にしっかりと繋ぐ」といったことが目的となります。こうしたインテーク面談の目的にあわせて、ロールプレイやグループワーク等の演習を交えながら、より効果的なインテークのノウハウについて取り上げる分科会を実施します

分科会B

「助成金活用入門講座～助成制度の紹介、申請書の書き方、採択後の作業～」  
日本財団海洋グループ海洋技術開発チーム 和田真



日本では様々な助成財団が「助成金の拠出」という方法で資金的にNPOやNGOの活動を支援しています。この助成金を獲得し、上手く活用すれば活動を広げるきっかけになるのですが、NPO・NGO側からは「助成制度の調べ方がわからない」「助成金の申請書を書いたことがない」「何度申請しても不採択ばかり」という声も多いのが現状です。この講座では、国内の助成制度の現状、助成制度の探し方、申請するために必要な準備、申請書の書き方、助成財団の審査の視点、採択された後の作業(助成金を最大限に活用するコツ)等をお伝えします。

ファンドレイジング実践入門～善意のお金の集め方／日本ファンドレイジング協会事務局長 徳永洋子



本講義の目的は、「団体メンバーと力を合わせて、楽しくファンドレイジングに取り組みたい!」という気持ちになることです。ファンドレイジングというと単なるお金集め・寄付集めと捉えられがちですが、本来は多くの市民の共感と支援を得ながらミッションを達成していくためのプロセスです。それは、自団体のミッションを理解し、団体の活動が何を達成しているかが分かっているからこそ、取り組める仕事なのです。自分たちの活動の共感を広げていくファンドレイジングは、とてもエキサイティングでワクワクする仕事であることは間違いありません。さあ、今日からファンドレイジングを始めましょう!

分科会C

「『被害者学』からみたひきこもりの理解と支援について～事例から学ぶ～」  
宇部フロンティア大学・大学院教授 西村秀明



“ひきこもり”とは人間のとる行動様式のひとつです。彼らは様々な事情を抱えてひきこもっています。その事情に率直に耳を傾けると、多くの場合対社会的関係性のなかで何らかのかたちで傷つけられるという体験を有し、心身とも疲弊しながらも懸命に生き様を模索しているということがわかります。こういった事態に対し、「被害者学」を通して彼らの心性の理解を深めていくとともに、私たちにはどのような支援が求められているのか、多くの事例から学ぼうと思います。

「非行少年少女をはじめとした困難を有する子ども・若者とのように向き合うか～見立てと処遇～」  
大阪刑務所分類審議室長 青木宏



少年鑑別所や刑務所の技官として、多くの非行少年や犯罪者に面接してきた経験に基づき、彼らとの接し方、面接における隘路や留意点、見立てと処遇との相互作用等について、もっぱら実務的な観点から語りたいと思います。たとえば、彼らの支援へのニーズは、多くの場合、「あるように見えて、そこには無い」「無いように見えて、実はある」ものなのですが、そういった微妙な感触を伝えられればと考えています。なお、後半ではロールプレイングを用いて、より具体的に彼らの心理に迫り、面接の在り方を検討してゆくこととします。

「見方を変えて子どもの問題をみる～発達という視点から～」  
北海道大学大学院教育学研究院准教授 加藤弘通



この分科会では、近年、教育現場で特に問題になっている発達障害やひきこもり状態について、暴力行為や自殺などの具体的な事例を取り上げ、多角的な視点で「発達」を考え、問題行動をとらえ直していきたいと思えます。「発達」という視点で当事者の問題行動をとらえることで、支援方法の選択肢を広げることが狙いです。具体的には(1)「発達という見方を理解すること」、(2)「発達という見方のメリットを知る」こと、(3)実際に具体的な事例を「発達という見方でみる」ことを、ビデオや簡単な心理学実験ワークを通じて実施したいと思えます。